

# 精神史の社会学

## ——ソローキン研究序説——

### 目次

細川 幹夫

- 一、知識社会学的観点からみた自叙伝
- 二、若いころ
- 三、人生に影響を与えた外的環境
- 四、人生初期の精神生活を規定した明瞭な要因
- 五、初期の精神生活の不明瞭な要因
- 六、最初の危機とその明瞭な要因
- 七、精神的危機以後の統合
- 八、新しい危機と再統合
- 九、結論

ピティリム・A・ソローキン（一八八九—一九六八年）ほど幾多の苦難の道を歩みながら、その中で学問し、しかも多彩な活躍をしてきた社会学者は少ない。ソローキンの学問的業績は彼の悪戦苦闘の人生から結実したものである。ソローキンは、晩年になって、自分の歩んできた人生と学問的業績との関連性を、自分の主要な関心領域であった「知識社会学」の立場から、回顧しようとした。また、その立場は個人の内面に切り込む客観主義と主観主義を統合した新しい研究分野の開拓でもあったのである。

ソローキンの精神史をよく知るためには、一九六三年に出版されたソローキン著『永い旅路—ピティリム・A・ソローキン自叙伝』がある。これをさらに要約したものに、フィリップ・J・アレン編『ピティリム・A・ソロー

「ソローキン評論」(一九六三年発行)に寄稿した「わが精神史の社会学」という論文がある。ここでは、この後者の論文を中心対象にして、ソローキンの生涯とその社会的・文化的環境、歴史的課題、ならびに彼の学問的業績を概観してみよう。

### 一、知識社会学的観点からみた自叙伝

知識社会学の主要課題の一つは、ある個人ないしは集団の精神史の本質的な内容、形態、変容を条件づけている諸要因を研究することである。その要因とは、彼らの言語、科学的理念、宗教的その他の信仰、哲学的観点、道徳的・法的確信、審美性、政治的・経済的イデオロギー、社会的願望、および価値観一般である。知識社会学もっと正確にいえば、精神史の社会学は、ある個人ないしは集団の精神の歴史がその個人の人生ないしは集団の中で、どのようにして、なぜ成立するか、それがなぜ他の人々や集団の精神の歴史とまったく異なるものになるのか、という基本的な問いに答えようとするものである。

精神史の社会学は、これらの諸問題を、広範な文化や社会の精神内容の研究(精神史の巨視的社会学)を通じて、またある個人の精神史の研究(精神史の微視的社会学)を通じて、明らかにしようとするものである。ソローキン著『社会・文化動学』は、これらの諸問題を巨視的社会学の観点にたつて検討したものである。本稿は、ソローキン自身の精神史を明らかにするために、ソローキンの自叙伝『永い旅路』をも参考にして、微視的社会学の観点にたつて諸問題を取り扱う。

他人が書いた伝記を使うかわりに自叙伝を使ったのは、次のような理由によるのである。第一に、人間は自分の精神史、つまりその内容・動機・持続性・変化を、他人のものよりも詳細に、しかも直接内面から知っているからである。第二に、人間は、自分が直接経験していることであれば、部外者の伝記作家や観察者が気づかない多くの動機や変化にも気づいているのである。伝記作家や観察者たちは、一般に、研究対象の行動や内面の経験についてごく僅かの記録を取り上げるだけであり、しかもその死物に等しい記録さえも、とんちんかんな形で取り上げているのである。たとえばライブニッツの単子論に示されているように、各人の心や魂は、最も親密な友人や最も近い親戚のもの以外の部外者の観察にはおそらく閉じたままか、部分的にしか開かれていないのである。第三に、ソローキンは晩年になって、彼の精神史がなぜ現実的な経路をたどり、別の経路をとらなかつたのか、また特に、彼の社会学理論やその他の「精神的所産」がなぜそのような性格をとるようになったのか、それを見いだすことに関心をもっていった。ソローキンは、彼の精神史の過程を決定した理由や要因、特に彼の社会学理論やその他の「精神的所産」の性格を理解することに、個人的な関心をもっていたのである。

自叙伝という資料には、このような利点があるのに対して、もちろん重大な欠陥もある。しかしながら、もし学者が自分自身や他人に対して正直であろうとすると、また自分の人生記録を歪曲しようとする特別の理由を持たないかぎり、また自分や自分の精神史を「正当化」し、「合理化」し、「美化」するという、常に存在する危険な誘惑に負けないかぎり、そのような人によって語られた自叙伝資料を使うことの利点は、その不都合さに比べて、はるかに大きいように思われる。

このような注意点を、実はソローキン自身が述べているのである。こう述べたあと、彼は自分の精神史の簡単な社会学的説明に入り、主要な研究のトピックス、彼の理論や「哲学」の本質、ならびにこれらの「精神的所産」が人生の過程でどのような変化を受けてきたか、その主要な変化にかかわる諸要因の分析を試みている。

ソローキンは一八八九年一月二日に生まれ、十一歳までコミ族の中で育った。コミ族はロシアの北方にいるウゴル・フィン族に属するのである。彼のロシア人の父は旅職人で、正式にギルドの免許を持った「金箔、銀着せ、聖像製作のマイスター」であった。父がロシアの都市ヴェリキ・ウスチウクから三百マイル以上離れたコミ地方に、どのようにして、どんな理由でやってきて、死ぬまでそこにいたか、ソローキンは知らないという。考えられる理由の一つは、ロシアよりもコミで仕事が多くあったからであろう。母はコミの農民の娘であった。

母についてソローキンが覚えていることといえば、彼女が死んだときのことである。その時、彼は三歳であった。この場面が彼の最初の記憶であり、自覚して思い出すことのできる最初のものである。この出来事以前の人生について、彼はなにも思い出せない。ソローキンのこのような個人的な体験が、人間の肉体によって伝わる記憶、特に出生時の精神的外傷やさまざまな性的経験の記憶に関する「ダイアナティック」理論や精神分析の理論を、なんの根拠もない単なる夢想にすぎないとする理由の一つである。母は文字は知らなかったが、美しい、頭の良い、非常にさわやかな人であったということを、ソローキンは父や親戚、近所の人々から聞いて育った。

父については、二つの違ったイメージを持っていた。穏やかな時期、数週間ないしは数カ月は、素暗らしい人柄を示し、自分の息子たち―末弟は伯母の養子となる―をかわいがり、援助し、近所の人々には声をかけ、仕事には勤勉で誠実であった。また、早死にした妻には貞節を守り、生涯再婚しようとはしなかった。父は人に「んにちわ」とか「さようなら」と挨拶するかわりに、「キリストは復活しました」と言うのが口癖であった。この穏やかな時期の後に、泥酔する時期がやってきて、時々アルコール中毒の状態にまでなった。この時の父親は哀

れな姿となり、憂鬱症に陥り、いらだち、子供に乱暴をはたらくこともあった。ある時、ソローキンと兄は父親にハンマーでたたかれ、ソローキンはそれで上唇に怪我をしたことがあった。その傷は長い間残っていた。

そんなことがあって、すぐに兄弟は父から離れて独立し、自分たちの生計を立てるようになった。ますます寂しくなった父親は、一年後に、遠く離れた村で独りこの世を去っていったが、そのことを兄弟が知ったのは何週間も経過してからであった。通信機関がまだ発達していなかったためである。

もつとも、父親はアルコール中毒でたまに暴力をふるうことはあっても、決して残酷な人ではなく、三人はともに温かい相互愛をもって生活してきた。泥酔状態になっても、父親はフロイドのいう暴君のイメージとはほど遠く、自分の子供たちに対して鈍感な人、残酷な人ではなかった。穏やかな時期に比べて、泥酔の時期はかなり短く、たまに起こる程度であった。その時期を除けば、家族三人は温かい相互愛によって結ばれ、調和のとれた良いチームであり、苦楽をともにする共同体であって、かなり創造的な仕事をするチームであった。

兄弟としての深い相互の愛着は、兄との間にはずっと続き、さらに末弟との間にも続いた。兄弟はたがいに助け合ってきた。この献身と愛は、兄と弟が共産主義体制との闘いの中で死亡するまで続いた。

ところで父親から独立した兄弟は、自分たちの生計を立てるため、一年ばかり村から村へと旅職人の仕事を続けた。そして、人口約千人の小さなロシアの町ヤレンスクにたどり着き、そこで教会の仕事をたくさん見つけた。それは教会の尖塔や屋根、内壁や外壁の塗装、教会の聖像やその他の祭り物の金箔と銀着せの仕事であった。その時、ソローキンはある事件に出会い九死に一生を得たが、その事件をいつまでも憶えていて、次のように述懐している。「われわれが教会の尖塔を塗っていた時のことである。急に嵐に襲われて、すんでのところ滑り落ちるところであった。だが、幸いにも目の前に運命の分かれ目となる一本の強いロープがあって、それにかま

ことによつて九死に一生を得ることができた」と。彼は「この世に生かされている使命」について語りたかったのであろうか。それはともかく、このヤレンスクの町に来て、ソローキンははじめて都会というものを知ることができたのである。その時、ソローキンは十一歳位であり、兄は十五歳位であった。

この町で二、三カ月間仕事をして、兄弟はコミ地方に帰っていった。それから、数カ月間コミで仕事を続けていたが、ソローキンは思いがけなくも上級学校に入学することになった。この入学によつて、彼は学校に行く九カ月だけ兄と離れ離れになり、さらに二年後には、兄弟は別々の道を歩み始めることになった。この兄の指導と庇護による共同生活がなければ、ソローキンの生存と成長は保障されなかったであろう。換言すれば、彼らの生活は本当に兄弟愛に充ちたものであり、一方は他方の維持者であり保護者であった。のちに共産主義革命が起つて、共産党がソローキンの首に賞金を懸けて探し回り、彼が必死になつて逃げている時、末弟は自分の自由や生命の危険までも犯して、ソローキンを何回となく助けた。文盲であつた伯母や伯父も、小村リミアと一緒に住んでいた子供の頃、ソローキンを自分の息子のように扱つた。ほかに帰る家のない時でも、伯母の家は彼の帰るべき本当の「家」であつた。

これが、ソローキンの家庭的背景である。このように、若い頃のソローキンは家族や親戚、その他の人々から本当の、純粹な、温かい愛を受けて育つたのである。

### 三、人生に影響を与えた外的環境

ソローキンの精神的発達の分析に入るまえに、彼の人生に影響を与えた外的環境の歴史について概観しておく必要がある。このような背景を述べずに、自叙伝による微視社会学的諸問題を学問的に取り上げるのは、ほとん

ど不可能であるからである。以下の記述は、ソローキンの人生過程の要点である。

波乱万丈というのが、ソローキンの人生の最も重要な特徴であろう。彼は七九年の人生の過程でいくつかの文化環境に接してきた。まずコミ地方の狩猟文化、続いて農業文化、つぎにロシアとヨーロッパの都市文化、最後にアメリカの大都市における技術文化である。彼の人生は、貧しい旅職人と小作人の母との間に生まれた息子として始まり、やがて野良仕事の手伝い、旅職人、工場労働者、書記、教師、コーラス指揮者、革命政治犯、ジャーナリスト、大学生、政府機関紙編集員、ケレンスキー内閣秘書官、追放、ロシア・チェコ・アメリカの各大学教授という経歴を経て、ついに世界的名声を得た学者になつていった。

ソローキンの人生で波乱を伴わないものはなかった。普通の人の生涯に見られる歡喜・悲哀・成功・失敗の外に、六回も投獄され、しかも死刑の宣告を受けて、毎日いつ共産主義者に銃殺されるか分からないという状態で六週間過ごした経験をもっている。政治闘争で処罰され、兄弟や友人を失うことがどんなにつらいことか、ソローキンは骨身にこたえて知つた。だが、このような苦境にありながら、彼は独創的な論文も書くことができたのである。

このような生活経験によつて、ソローキンは、莫大な数の書物を読むよりも、また数多くの講義を聴講するよりも、はるかに教えられるものがあつた。

すでに述べたように、父親から独立し、やがて兄からも独立したソローキンは、一文無しになつた。しかし、自分の人生行路を自由に歩みはじめ、自分の生計を自分でたてることができるようになった。やがてソローキンは師範学校の学生になつたが、政治活動をしたために一九〇六年に逮捕され、卒業前に四カ月間刑務所に入った。その後、首都ペテルブルグに出て、夜間学校の学生、心理神経科大学と聖ペテルブルグ大学の学生になつた。さ

らに二回投獄されたが、この経験がソローキンに犯罪学と刑罰学を専門分野として専攻させる端緒になったのである。数編の論文を書いた後、犯罪についての処女作『罪と罰、奉仕と報酬』（一九一三年）を出版した。

ロシア革命の勃発にともない、ソローキンはロシア小作農会議―共産党の命令によって解散―の創立者の一人となり、首都の新聞『人民の意志』の編集者、ロシア共和国議会議員、ケレンスキー内閣秘書官、ロシア憲法制定委員会―共産党政府の命令によって解散―の指導者になった。革命の初めから、彼はレーニン、トロツキー、カメネフ、その他の共産党指導者たちと激しく渡り合った。そのために、一九一八年一月三日に逮捕され、ロシアのバスチーユとも言うべきピーター・ポールの要塞に四カ月間投獄された。

まもなく釈放されたソローキンは、また共産主義者との闘いをはじめ、一九一八年にはアルハンゲリスクの共産党政府を転覆させる工作団の一員になった。一九一八年十月に再び逮捕され、ボログダ州の共産党政府によって死刑の宣告を受けた。六週間いつ殺されるかと待っている間に、レーニンの命令で釈放され、聖ペテルブルグ大学での学生生活に戻った。そこで社会学部を創設し、初代教授兼学部長になった。彼は一九二〇年から二二年にかけて法学と社会学に関して五冊の書物を出版した。その間、一九二二年に聖ペテルブルグ大学から社会学博士の学位を得た。しかし、彼は共産主義に同化しないため、一九二二年に再び逮捕され、最後にはソヴィエト政府によって永久国外追放を命じられた。（注）

（注）このような個人的な体験をとりあげるのは、孔子、ソクラテス、プラトン、アリストテレスにはじまり、マルクス、レーニンにいたる著名な社会思想家たち―共産党やナチ政権の手で逮捕され、追放され、処刑された卓越した社会学者たちは言うまでもなく―の大多数（大雑把に見積もって、約八〇パーセント）が「破壊」に類似した経験をもっていることに注目させるためである。

彼がベルリンに到着して数日後、大の親友マサリク大統領が彼をチェコスロバキアに国賓として招いた。ソローキンはそこに約九カ月間滞在したが、イリノイ大学とウイスコンシン大学からロシア革命について講義するようにとの招待を受け、一九二三年十一月にアメリカに渡った。翌一九二四年にミネソタ大学で教授職に就いた。そこで六年間、幸運な仕事に恵まれた後、ちょうど市民権を獲得した年の一九三〇年に、ハーバード大学に社会学部の初代学部長兼主任教授として招かれた。以後、ソローキンはハーバードで仕事を続け、一九五九年に隠退するまでそこにいた。

一九四八年にはエリー・リリー氏とリリー財団が、ソローキンの「どのようになれば人間を非利己的にし、もっと創造的にすることができるか」という研究に対して、十二万ドルを寄付した。この真摯な寄付によって、彼は一九四九年に当時のJ・B・コナント総長に相談し、ハーバード創造的利他主義研究センターを創設して、引退するまで、その所長を務めていた。このセンターは、後にアメリカ芸術・科学院に合併された。

ソローキンは、アメリカに渡ってから多数の学術論文を書くほかに、三十数冊の著書を出版した。その多くは数カ国語に翻訳された。たとえば『現代の社会学理論』は十一カ国語に、『現代の危機』は八カ国語に翻訳され、その他の著作でも数カ国語に翻訳された。結局、彼の著書は延べ数で約四六カ国語に翻訳されている。

この多数の著書・論文は、主に彼の研究と著作活動に対する尽きることのない興味にもとづいている。この著作活動は、ソローキンに無上の自己実現の道を開き、創作意欲を喚起し、精神的・道徳的成長の最も実りある形を作り、最も純粋なりクリエーション活動となったのである。こうした活動にはある程度の疎外や失敗がつきものであるが、それがかえって彼の現実感覚を豊かにし、人生の悲劇的な側面に対する知覚を深めるのに役立つきたのである。このような理由から、ソローキンはこの種の創作活動を自分のリクリエーションとして選び、ほ

どんど著作活動に没頭してきたのである。

アメリカ合衆国での彼の学生生活は、政治問題やその他の煩雑な事柄によって邪魔されることがなく、またアメリカの大学から与えられた科学研究の条件はきわめて良好なものであったので、彼の執筆活動はますます盛んになっていった。ハーバードでは教授職と行政職を兼務していたので仕事はかなりきつかったが、それでも研究と著述にはかなり時間をさくことができた。ソローキンはこの種の仕事には大学に出勤する前の早朝と、さまざまな仕事から解放された夕方を充てるのが通例で、このような生活パターンは晩年になっても変わらなかった。

これは、ソローキンのがらりくらしと「無為に過す楽しみ」や、さまざまな楽しみを無視してきたということではない。「何もせずに多忙であるよりは、何もしない方がましだ」という老子の古い教訓にしたがって、彼はぶらぶらしたり、コンサートに出席したり、美術品を見に行ったり、文学の傑作を読んだり、キャンプを張ったり、魚釣りに行ったり、山登りしたりして、精神的労働を休止したこともしばしばあった。

また、晩年の二五年間は、アザリアやシャクナゲ、ライラック、バラ園作りにも励んだ。この植物園には毎年数千人の人々が見物に訪れた。また、マサチューセツツ園芸協会から金メダルを受賞し、数カ国の雑誌に全員カラー写真で掲載されたこともある。また、彼は一部の親密な友人たちと懇親会を開いて楽しんだこともある。そのメンバーの中には、幸運にも、著名な思想家、芸術家、その他の分野の代表的な指導者がいたのである。

以上は、ソローキンがぶらぶらしたり休息したりして、生活を更新し、豊かにし、高尚に示してきたこと、しかも偉大な、意味のある、創造的な、わくわくするような最上のリクリエーションを示してきたことを示している。

ソローキンの人生の素描を終えるに当たって、次のことも述べておかなければならない。彼は一九一七年のロシア革命の最中に、細胞学者のヘレン・バラティンスカヤ博士と結婚した。彼女は植物学雑誌やその他の生物学

雑誌に多くの研究を発表し、終生にわたって研究を続けていた。五十年余の結婚生活において、彼らには離婚や別居の問題はなかったし、またその理由もなかったという。

この夫妻の間には二人の息子がいる。長男はピーター・P・ソローキン博士で、現在IBM勤務の物理学者である。次男はセルゲイ・P・ソローキン博士で、ハーバード大学保健衛生学部の準教授を経て、現在ボストン大学医学部の解剖学の主任教授を務めている。この兄弟はすでにそれぞれの分野で多数の論文を発表し、現在でも研究に打ち込んでいる。ソローキンの友人たちがソローキン家族を評して『小さなソローキン大学』と名付けたことがある。ソローキンの表現によれば、この家には数学者―物理学者(ピーター)、二人の生物学者(ヘレンとセルゲイ)、一人のもぐりの哲学者―社会学者―心理学者―よろず屋(ピテリム)がいたからである。

ソローキンが七三歳になった時、彼は「私はまだ老人ではない。若い頃と同じように科学的研究やその他の活動に多忙である」と述べている。この活躍の原因は遺伝的要因に関係しているのだろうか。実は、母は三十歳代で、父は四十歳代で死亡しているのである。それとも、彼が信じていたように、あまり悪徳を行わず、さりとて、きばって有徳になろうともしなかったことに関係しているのだろうか。または、特に人生において短命な偽価値を追求することよりも、むしろ本当に偉大な永遠の価値を追求してきたことが、彼の老化を遅らせる原因であったかどうか。それは正確には分からない。おそらく、これらの諸要因がこの問題にかかわってきたであろうし、特に後者の二つの要因が大きな役割を演じてきたことであろう。

#### 四、人生初期の精神生活を規定した明瞭な要因

まだ統一のとれない未熟な子供の心の内容は、子供が生まれ育ち、そしてかかわり合っている人々や集団の精

神生活の内容にほぼ一致しているものである。この原則は、ソロキンの子供時代にも当てはまる。つまり、彼を取り巻く社会文化的環境の精神的特性が、彼の初期の精神性の大半の内容を形作っていたのである。

(一) 生来の言語と学習した言語　ソロキンが方言とロシア語とを話すコミ地区で生まれ育ったことにより、これらの言葉が自分の意志とはかかわりなく、自然に彼の生来の言語になった。やがて、これらの言語を実際に使う機会がなくなったので、彼はコミ地方の言葉をほとんど忘れてしまい、ロシア語もほとんど使えなくなった。このことは、われわれの精神作用と行為がすべて目的をもち、常にある目標をもっているものだ、という一般的な主張に矛盾している。

彼は後年になってラテン語、フランス語、英語、さらにドイツ語、スラブ語までも学んだが、この場合には、自分で意図して学んだのである。これらの言語は、「生来の」言語のように、自然に彼の精神の中に入ってきたものではなかったが、目的をもって合理的な決断と大なる努力をして、学んだものである。このような言語知識は、ロシアの大学に入学して科学的研究に従事し、学問的地位を獲得し、そしてロシアや追放後のアメリカで、大学教授として生計を維持するために必要な条件であった。

(二) 人生初期の宗教的信仰　コミ地区の人々の宗教は異教徒の信仰が混入したロシア正教であったが、この信仰と儀礼は、自然にソロキンの宗教的信仰と行為になった。子供の頃、それが心の中に刻印され、父や兄の仕事を手伝っていて、ますます強化されていった。塗装、銀着せ、金箔、聖像制作の仕事は、主として村々の教会で行われた。彼らの仕事の大半は、教会の建物の中や周囲、屋上で行われ、建物を塗り、祭り物を作り、銀着せや金箔を施すことであった。この仕事を通じて、ソロキン親子は自然に村の聖職者と話を交わし、交流を深めたのである。

要するに、ソロキンの少年時代には、このような宗教的環境が主要な雰囲気の一つであって、そこで生活し働くことによって、彼の人生初期の信仰、儀礼、道徳的標準、その他の価値観を形成していったのである。その影響は非常に大きい。古典である『聖人伝』を読んで感激し、隠遁者になろうと思つて、たびたび近くの森に独りこもつて祈りを捧げたこともある。このような宗教的・道徳的な環境が、彼の創造的な素質を発達させる重要な条件となったのである。

教会の聖歌合唱団にも加わつて、教会内では著名な歌手となり、後に教会合唱団の指揮者にもなった。また、父の仕事を手伝うことによって、家族で一番のデザイナー、塗装者、聖像制作者になった。宗教的儀式における祈りや賛美歌を心底から学ぶことによって、長い冬の夜に行われた近所の小作農達の集会では、立派な説教者・教師を務めたこともある。宗教儀式の華麗さ、特に晴天の日の教会の屋根の頂上から見る田園の美しい光景、その他の無数の情況は、ソロキンの精神生活を情緒的・知的・審美的・道徳的に豊かにしてきたのである。物質生活は貧しかったが、彼の子供時代は楽しみと悲しみに満ち、わくわくするような経験に満ち溢れていたのである。

(三) 初等教育　ソロキンは初等教育で習得する読み・書き・算数を、いつ、どこで、どのようにして学習したのか、それを正確に記憶していない。彼は仕事を探して村から村へ移動する一種の遊牧民的生活をしていたので、正規の初等教育を受けることができなかったし、卒業もしていない。このような旅職人の生活では、滞在した村の学校に、せいぜい数日か数週間、たまに出かける程度であった。

彼の最初の教師は、単に文字を知っているだけという小作農の女性であった。彼女は、ソロキンの伯母が住んでいる小さな村で、自宅に子供達を集めて、読み・書き・算数の初歩を教えていた。ソロキンは、その「学

校」で学業優秀のため、初めての最高賞をもらった。この賞は紙に包んだ硬い菓子一個であったが、彼はよほど嬉しかったとみえて、包装紙の上に描いた黄緑の桃の絵と賞品を伯母に見せ、伯母の丸太小屋の壁にかけた聖像の横に大切に飾ったのを、いつまでも鮮明に覚えていた。後年、ソーキンはさまざまな学術研究機関から学位や賞金や名誉を受けたが、そのどれよりも、この簡素な賞品の方が嬉しかったという。このようにして、一貫性はないものの、彼は初等教育の知識を獲得したのである。

また、コミ地区の村々に所蔵されている、あらゆる書物をむさぼり読んだり、父や兄に教えてもらったり、村の教師や聖職者、書記、開業医などのインテリと対話したり、文盲ではあるが賢明な小作農達との会話から、大いに知識を吸収したのである。ソーキン一家の遊牧民のような生活（ソーキン家の「社会移動」）によって、彼は常に新しい人々と出会い、新しい状況や挑戦に遭遇して、人生経験と知識を大きくしていったのである。このような教育を受けてきた結果、彼はカム地区の村で行われた公開の上級学校―アメリカの学校制度では、八、九、十年年に相当する―への進学試験で苦勞をしなかった。ある村で仕事をしているときのことであるが、たままた新しい学校への入学試験があった。その行事は村一番の重大な出来事であった。その学校の生徒になりたいと思っっている少年達はもとよりのこと、大半の村人達が公開の入学試験を見物するために来ていた。ソーキンは、はじめ試験に参加する意図はなかったが、好奇心にかられて見物人として来ていた。試験問題を聞き、それがあまりにも簡単であるので、自然に試験を受けることになった。彼は試験に見事合格し、入学を許され、五ルーブル（二・五〇ドル）の学費が与えられることになった。この学費は全学年にわたって学寮の舎費と食費に充てられるものであった。このように全くの偶然から、彼の正規の学校教育は高等科からはじまったのである。これが彼の一生の仕事となる大学教授への教育過程の最初の階段になった。

地方教区の司祭を校長にいただく学校の五人の教師達は、非常に善良な人々であり、優秀な教育者であった。図書館やその他の設備は、小学校のものよりはるかに良好であった。学生の大半は有能であり、身体、精神、道德的行為の面で健全であった。このような学校の全体的雰囲気は、彼の精神を刺激して幸福にし、哲学的には理想主義にした。彼は最も優秀な生徒であったので、三年間にわたって、毎年五ルーブルの奨学金が与えられた。それらは九カ月間の部屋代と食費として支払われた。残りの三カ月間は、兄と一緒に以前の仕事をしたり、伯父・伯母の農作業を手伝って生計を維持していた。

この三年間で彼の知識は著しく増大し、教養は豊かになり、創造的な素質が覚醒し、彼の人生観は統合された。その人生観は、神と自然、真・善・美と宗教、科学、芸術、倫理がすべて相互に調和して結びついているという理想主義的な世界観であった。これらの価値の間には大きな葛藤も内的な矛盾もなく、したがって彼の心の平和は乱されることもなかった。人生につきもののさまざまな悲哀や苦痛の体験、つまり父と伯父の死、兄のアルコール中毒の傾向、ソーキン自身の肺炎、その他の歓迎されざる出来事はあったけれども、この世は生きるに値する、すばらしい場所にみえたのである。

その時には、ソーキンは、近い将来、この調和のとれた安全な世界観が崩れ、その価値に乱れが生じて、再検討せざるを得なくなるとは考えてもみなかった。彼の優秀な学力を認めていた学校の先生や県の高専教育機関は、彼に対してロシアのコストロマ県にある宗教団体の経営する師範学校に進学することを勧めてくれた。加えて、先生方は彼に対して生計の維持に必要な資金の面倒もみてくれるような奨学金を勧めてくれた。彼がその後の教育過程を進み、やがて大学生となり、教授職に就き、そして自分の一生の仕事として、かなりの学問的業績を挙げるようになったのも、もとはといえば刺激的な共同体の行事に偶然参加し、学校に入学する試験をたまた



ま受けたからにはかならなかった。

(四) 人生初期の道徳的・審美的・政治的・経済的心性

このような分野における彼の考え・好み・確信も、

大半はコミ地区の人々が共有していたものであり、また父や教師、司祭、学友などから学んだり、職業生活を通じて読書したことに由来している。コミ地区の小作農社会の心性と習俗は、十戒や相互扶助の格言に似たもので統一されていた。その地域には泥棒がいなかったため、小作農の家には鍵がかかっていなかった。重大な犯罪は、まったくと言っていいほど、起こらなかった。軽犯罪でも皆無に近かった。大半の人々は自分達が説く道徳律を実践した。相互扶助も同じように共同体の全生活に一貫する日々の行動様式であった。道徳規範そのものは神から授けられたものとみなされ、それは無条件に拘束力のあるもので、すべての人々に義務だと思われていた。同じことが、小作農の慣習法についてもいえた。このような道徳的な共同体に住んでいたソローキンは、当然のように、その道徳的規範を習俗とともに吸収した。

同じことが、彼の審美観や好みについてもいえる。彼の美の世界は、まず美しい自然界に源流があった。すなわち、工業排水や生活排水にまだ汚染されていない純粹な大河や湖、数マイルにもわたる果てしない森林、村々をとり巻く花盛りの草地や田畑、冬の広大な積雪状態、夜空に輝く星座をちりばめた白夜、雄大な大海にぼつんと取り残され、村や集落が汚点のように見える大自然、その他の光景である。この美しい自然の姿が彼の生涯にわたって消すことのできない印象となり、その好みが大都市や工業地帯を回避させた。

自然環境の中に住む野性動物の生活は、彼の審美的経験のもう一つの領域であった。汚染されていない川や湖での魚釣り、動物の生活、常に変化する自然の光景を見ること、散歩、このような自然の中で働くことが、彼の審美的渴望の大部分を満たしていたのである。

彼の審美観を構成したもう一つの要素は、コミ地区やロシアの農業・狩猟社会における人為の芸術世界であった。彼の音楽の好みもまた、都市や商業社会の世俗音楽、たとえばクルーニングやジャズ、騒音（ロシアのチャシュテュスキ）にあるのではなく、田舎の美しい民謡にあった。この地域には、ロシア人やウゴル・フィン人の作った古い民謡がまだ残っていた。ここや近隣地域では、著名なロシアの学者や作曲家達が民謡を収集していた。たとえばリムスキー・コルサコフ、ムソルグスキー、チャイコフスキー、カスタルスキー、その他である。だから、後年になって、ソローキンがこのような作曲家の音楽やバッハ、ヘンデル、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンらの音楽を聞いた時に、その旋律や曲の多くが彼に馴染み深いものであったのである。彼はコミ地区やロシアの小作農達から子供の頃よく民謡を聞いていた。小作農達は普段、共同体の作業中や魚釣り、収穫期、あるいは共同体の祭り事、冠婚葬祭のような人生の重大事に、一緒に歌っていたのである。

教会の宗教音楽も、彼の好みに強い影響を与えたものである。それらはロシアの教会で使われている「伝統的な」音楽であったり、初期のロシアの簡単なチャント（唱歌）、すなわちキエフスキーやズナメンスキーのチャントであったり、ときには、ポルトニャンスキー、ルヴォフ、アルハンゲルスキー、カスタルスキー、チャイコフスキー、その他の有名なロシアの作曲家が作った簡単な宗教曲であった。コミ地区やロシアの教会は大きな合唱団や独唱者を保有していなかったけれども、前述のような形のロシアの宗教音楽は、それ自体で美しくすばらしいものである。彼自身も教会で独唱者や歌手の一人になったり、小さなコーラスの指揮者となった経験があるので、そのことが強烈に印象づけられ、彼の音楽的好みを生涯にわたって条件づけていたのである。彼は晩年になってもそのような音楽を楽しみ、時には多くのレコードを自分のハイファイ・レコードで聞いていた。

彼の識字教育は、コミ地方や隣接地方の民話、民謡、おとぎ話、英雄詩などによって行われた。この想像豊か

な文芸は、ソローキンが学校や書物から学んだことのあるプーシキン、ゴーゴリ、トルストイ、その他の偉大なロシアの作家達の文学作品の中にも取り込まれている。この地域の大半の小学校でも、生徒はこれらの文芸を教え込まれ、偉大な詩人達の大半の詩を心の中に刻み込んでいた。その民芸と古典は、ともに純粋な文芸作品であって、都市・工業社会にみられるような通俗的な商業的出版物ではなかった。このことはソローキンが「すぐに捨てられるような文芸作品」や商業上の「ベスト・セラー」、「イエロー・ジャーナリズム」(事実を曲げて興味本位に記事を書く雑誌)などを生涯にわたって嫌悪し続けたことと関係がある。

ソローキンが聖像その他を描いたり、聖像を銅や銀で装飾する仕事をしていたことや、教会の中でプレスコ絵画や聖像、その他の―ときに美しい―儀礼対象物に囲まれて生活していたことが、線や形や色彩に対する鋭い感覚を発達させ、彼のその後の絵画・彫刻・建築への関心や、これらの芸術に対する美的嗜好を条件づけていた。

さらに小作人の民俗舞踊や祝祭、見せ物、色とりどりの単調な優雅さと静かな演劇をとまなう儀式は、彼の審美観を形成した、もう一つの根源であった。

彼の政治観や経済観の形成に関して、狭い意味での「政治」や「経済」には、若いころは関心がなかった。この地域のコミ人やロシア人は、奴隷も農奴もまったく知らず、ドイツのゲマインシャフトやロシアの原始村落共同体 (obshchina) に似た村落共同体の直接政治のやり方によって、自分達の地方の政治的・経済的問題を民主的に運営していた。村落共同体は自分達で土地を共有し、個々の小作農の家族間で、その規模に応じて、また時の流れに応じて、土地を均等に配分したり、再配分していた。そこではゲマインシャフトの相互扶助の精神がまだ生き続け、いろいろな形に現れていた。

多くの活動は村落共同体全体で行われていた。このような条件下では、著しい不平等や鋭い経済的・政治的・社会的階層化は発達しなかった。そこには富豪や特権階級や上流階級もいなかったし、極貧の者や公民権を剝奪された者もいなかった。性による差別もほとんどなかった。したがって、真の「階級闘争」はぜんぜんなかったし、階級意識に基づく政党もなかった。だから、郡の選出議員 (zemstvo) の仕事は、主に学校や医療センターや、その他の教育文化施設を建てることであつた。中央の王朝政府の統制も非常に限られたものだった。ロシアの多くの民族集団の中でもコミ族は、最も文化的で、最も民主的な国民の一つであつた。

このような政治的・経済的条件の中で成長したソローキンは、当然のように、平等な独立、独立独歩、相互扶助の精神を吸収した。彼の経済的条件は、裕福な小作人の条件よりも貧しい方に近く、したがって十分な食事、暖かい部屋、衣服、その他の生活必需品をもたなかったけれども、このような条件に対して強い拒絶感も持たず、ごく僅かの場合を除いて、孤独や不幸や抑圧なども感じたことはなかった。彼の生活は素晴らしく、意義深く、わくわくするような冒険に満ち、際限のない希望に満ちたもののようにみえた。彼は小作農の共同社会の一員として、仲間や自分自身と心穏やかに暮らしていた。

以上の明暗すべてが、彼の人生初期を形作った明白な要因であつた。とりわけ、近代的と称する学者達がしばしば「原始的」、「後進的」とみる社会的・文化的諸条件は、本質的に堅実で豊かであつて、さまざまな人生経験を積む上で有効であつた。全体としてみると、その生活条件は、大都会、特に都市のスラム街のもつ社会的・文化的条件よりも単調ではなく、巨大産業都市の環境よりも精神的活力に満ち、道徳的発達にとってはあるかに有効であつた。

## 五、初期の精神生活の不明瞭な要因

これまではソローキンの人生初期（ほぼ一四歳まで）の精神生活を形作った明瞭な要因を概観してきた。これらの諸要因は、ソローキンが生活し、相互に対面交流した人々（個人や集団）の精神生活の特性を示している。さらに付け加えるべき要因は、ソローキンが読書や絵画や音楽を通して、またその他のコミュニケーション手段によって、間接的に接触してきた時代思潮（信念、知識、基準、価値）の特性である。彼の人生初期の地理的条件に加えて、これらの二つの要因は、彼の初期の精神的素養の大部分を説明しているが、その全体を説明しているわけではない。

たとえば、ソローキンが非常な読書家であり、多くの事柄を知るために飽くなき好奇心を発達させたのに対して、この地域の少年達の九九%（特に、彼の兄）が同じ条件下で生活し、同一の精神生活の雰囲気を感じていない。また、その他の少年達やソローキンの兄弟が、なぜこのような共同体の理念や価値や行為の形態という精神文化全体を吸収せずに、ソローキンが吸収したものと本質的に違ったのか。この差を示す理由は何か。そして、彼がその時期にすべての学校でなぜ最も優秀な生徒になったのか。一四歳の時点で、なぜ彼の精神的素養がその地域の少年達よりも豊かであり、精神的洞察が広がったのか。さらに、進学した学校の非常に嫌いな寮監兼料理人の非道をこらしめる際に、なぜ彼が二、三回リーダーになったのか。また、この「前代未聞の」行為をその非道に對してなぜ用いたのか。また、全生徒が認め、教師も暗黙に了解していたこの「極悪の」行為や、その他の非教育的行為に對する罰をなぜ自分自身に科したのか。そして、彼の観点が大半の生徒のものとは違っている時に、

なぜ彼は躊躇せずに大半のものと対抗したのか。この種の「頑固さ」を彼はかなり早くから示していた。このような疑問は彼の晩年に生じたのである。

同じ共同体に住む少年達や自分の兄弟との違いは、前述の精神的環境からは説明することができない。なぜならば、その環境はソローキンにとっても、兄弟にとっても、その他の少年達にとっても同じであるからである。もしあるとすると、大半の少年達がソローキンよりも良家に育ち、経済的条件やその他の社会的条件が良好であったからであろうという説明になる。彼の母は三歳の頃に亡くなり、父は善良な人であったが、慢性的なアルコール中毒であり、仕事を探しに出かけている時には、「家」にいないことがしばしばで、したがって良い意味での「家庭」ではなかったからである。

多くの学者は、この差異をきつと遺伝因子によって説明しようとするであろう。しかし、そのような説明は未知なるXをさらに未知なるYで置き換えるにすぎない。第一に、ソローキンが自分の家系を探す限り―父、母、兄弟、伯父、伯母、祖母を知っているにすぎないが―彼の親戚、両親、祖父母たちは、特別優秀な業績を挙げたわけでもない。ただ文盲の伯父だけは、人間の解剖学について何も知らないのに、折れた骨を上手に接ぐことができた。伯父は骨折を簡単な手作業で、田舎の接骨医よりも早く、簡単に、しかも上手に接いだのである。彼は決して患者から料金をもらわなかったし、また「神から与えられた」能力を自慢もしなかった。しかしながら、この伯父は、彼の母の姉妹と結婚して姻戚関係にあっただけで、ソローキンとは直接の血のつながりはなかったのである。第二に、今日の生物学では、どんな種類の胚葉が、どの染色体が「幸運の」遺伝子であり、あるいは「不運の」遺伝子の担い手なのかを、いまだに確定していないし、誰がどんな遺伝を授けられているかも分からない。

そんなわけで、人格特性に関する大半の「遺伝学的」説明では、「遺伝学者」は、このような人格特性を親の胚葉の特定の性質に関する知見から推論したり予言したりせず、個人の既知の特性から仮定（還元）しているのである。もしある個人が顕著な創造的業績を挙げれば、彼らはその人間が幸運な遺伝をもっていたと結論づける。もし彼にきわだつた点がなければ、彼の遺伝は平凡か愚鈍であると仮定される。

この結びつけは、明らかに純観念的なものであり、未証明のものである。このような説明の仕方では、人間に与えられた「創造的恩恵」とか「因縁、たたり」だとか、あるいは「幸運、不運」だとか、「幸運なチャンスとか、不運なチャンス」だとかの仮説とたいして違わない。これらの諸要因は、人生を決めたり個人の精神的素養を決める上で、なんらかの役割を演じることはあるだろうが、現在の知識水準では、あまり役に立たなくなっている。現在の時点では、それらは捨て去られる運命にある。

## 六、最初の危機とその明瞭な要因

一四歳になった一九〇四年に高等科を卒業したソローキンは、クレノボ師範学校に進学した。その学校はロシア正教会の最高宗会議によって経営されている宗派学校であって、宗派の小学校の教員を養成していた。それは村の教会の教会の近くにあつて、キャンパスはキネシユマ市からほど遠くない織物工場・その他の工業地の近くにあつた。彼は新しい、より「文明化した」環境に入り、以前には知らなかった別種の人々と出会った。この学校の三年間の課程はかなり程度が高く、学生も教師もみな優秀であり、学校の図書館やその他の設備はかつての小学校や高等科のものよりも整っていた。

そこでソローキンが出会った部外者達は、いろいろな考え方や標準や価値観をもっていた。すなわち、小作農や工員、事務員、行政官、官僚、また地区のインテリ達、つまり教師、司祭、医師、作家、新聞記者、組織のリーダー、さらに「社会革命党」、「社会民主党」、「無政府主義」、「帝政主義」などのさまざまな政党の代表者、自由党や保守党の地方のリーダーなど、これら部外者はソローキンにいろいろな新しい理念や標準や価値を教えた。このような新しい事態、新しい人々と出会い、そして特に、これまで知らなかった書物や雑誌や新聞を読みあさることによって、彼の精神世界は急速に広がり、彼の精神的素養は豊かになっていった。このような衝撃は、一九〇四年の日露戦争によってさらに強くなり、またロシア全土に急速に広がった一九〇五年以後の革命の嵐によって一層強化された。

これらの諸要因による衝撃全体があまりにも強大であつたので、この学校に二年ほどいる間に、彼のそれまでの宗教的・哲学的・政治的・経済的・社会的イデオロギーの大半は脆くも崩れ去り、新しい見方や価値観が、それにとつて変わった。

彼のこれまでの狂信的信仰が、神学やロシア正教の儀礼を半ば無神論的に拒絶するようになった。学校で行われる教会への強制的出席や教条的な神学の教育課程は、この反抗心を著しく刺激した。それらに代わって、「科学的な革命理論」や「自然科学哲学」が大きな位置を占めるようになった。

これまで彼が信奉していた君主制や「資本主義」経済は、共和的・民主的・社会主義的観点に変容した。これまでの政治的無関心は革命への熱情に変わった。彼は学校内や近隣地域で反帝政の革命を唱道する熱心な指導者となり、社会革命党の指導者になった。社会革命党は、社会民主党に比べて、全労働者、つまり小作農、工場労働者、知的労働者などの政党であると主張した。マルクスの社会民主的唯物論や人間と歴史に関する経済的説明に比べて、社会革命党の哲学と社会学はもっと理想主義的であり、統合的であつた。それは創造的な理念、自発

的な努力、「個人との闘い」対「生存競争」、それに社会過程や人間の行為を決定する際に、非経済的要因の重要性を強調した。

ソローキンの以前の世界観は、マルクスの社会民主主義の「プロレタリア的」「唯物的」「経済的」イデオロギーよりも、この種のイデオロギーにはるかに類似していた。この類似性こそ、彼がなぜ社会革命党を選び、社会民主党を選ばなかったかの理由であるし、それ以後の人生で彼が決してマルクス主義のイデオロギーに「感染しなかった」理由である。

熱心な社会革命党員に変容したソローキンは、革命の福音を学生や工場労働者、近隣の小作農に広めはじめた。ところが、一九〇六年のクリスマス・イヴの時に、小作農の一集団と定期の会合を開いている際に、彼は仲間の革命党員と一緒に逮捕され、キネシユマ市の牢獄に入れられた。そこで彼は他の政治犯と知り合ったが、その中には、いろいろな著名な社会革命党員や社会民主党員がいたのである。これらの政治犯たちは、やがて牢獄を革命文書を保存する最も安全な場所に変えた。というのは、牢獄の看守たちが彼らのメッセンジャーとして協力するようになり、看守長は自分の事務室を提供して、電話その他の設備を彼らの活動に役立たせたからである。

約五カ月間収容されている間に、政治犯たちは毎日のように哲学的・社会的・政治経済的諸問題について討論した。マルクス、ミカイロフスキー、ラヴロフ、プレカーノフ、レーニン、クロボトキン、トルストイ、ダーウイン、ヘーゲル、その他の進化論者や哲学者の著作を読書したのに加えて、この討論は、革命思想家や哲学者、科学者たちの基本的論文を理解するのに、かなり役立つたのである。

この五カ月間に、彼は師範学校の一学期間で学ぶものよりもはるかに多くのことを学んだ。牢獄の中で、彼はまた多くの犯罪者、すなわち殺人犯、泥棒、夜盗、略奪者、その他の不運な逸脱者達と毎日のように会って、言

葉を交わした。この経験が彼に処女作「犯罪と罰則、奉仕と報酬」（一九一三年出版）を書かせるきっかけとなり、その後、聖ペテルブルグ大学で専攻分野として犯罪学と刑罰学を選ばせることになったのである。ここでもまた、「実存的な」個人の経験がその人の精神生活にかかわることを示しているようだ。

ソローキンは、五カ月間投獄された後に解放されたが、「警察の監察」下にあったので、彼は自分の住所・住所変更・活動状況を定期的に警察に報告しなければならなかった。学校から除籍された彼は、一種の「地下の革命専門家」になろうと決心し、工場から工場へ、村から村へと革命の福音を説いてまわり、革命の「細胞」や集団を組織した。このような「専門職」に対して、だれも金を支払ってくれるものはいなかったため、時々、空腹と寒さに震え、家無しのみじめな生活をし、いつも法に縛られ、集会中にコサック兵や警官の銃口の標的になることもあった。だが、約三カ月間、ごく僅かの革命家と接触するだけで、このような孤独な「伝導活動」をした。

この時期の終わり頃、彼の健康と神経は衰弱し、活力は非常に衰え、逮捕は時間の問題となった。彼の精神生活における危機要因のいくつかは、かなり明白である。それらの要因とは、彼が師範学校やその地域において出会い、大きく吸収した新しい時代精神や価値観、新しいタイプの人間や新しい環境である。特に、そのイデオロギー・価値・情熱でロシア全土を席卷した「革命精神」は重要であった。彼が社会革命党を選択し、社会民主党とそのイデオロギーに共鳴しなかったことは、彼のこれまでの理想主義的世界観とある程度関係がある。彼が普通の犯罪者と接触して話し合ったことが、彼に犯罪学と刑罰学の分野で処女作を書かせ、その分野を専門にするきっかけになったことは、ほぼ間違いない。

しかしながら、このような明白な諸要因は、多くの知識社会学者が主張するほど、彼の社会的立場や集団構造や所属階級の変化に関係していない。むしろ新しい環境や一九〇五―六年にかけて吹き荒れた革命の嵐の中で出

会い、書物や人々から学んだ異質の時代精神や文化価値に関係があるのである。また、彼の「精神革命」は師範学校に対する遺恨やそこでの疎外の結果でもない。彼は逮捕されるまで、教師や学校当局、学生たちに良くしてもらっていたので、学校や当局に遺恨などみじんも持っていない。このようなわけで、彼の精神的大変革の要因は、明らかに彼が学んだ新しい理念・価値・情熱にあり、また彼自身の選択と心中でこのような思想が発達したことにあらずである。

この仮説はソローキンの精神的危機の大部分を説明している。そのことは、その後の論文、特に『社会・文化動学』(Social and Cultural Dynamics)において、彼が社会的・文化的・人格的变化の基礎的要因を文化的・精神的要因に求めて、集団や社会階級の構造という社会的要因に求めなかったことをも、ある程度説明している。さらにこの問題を検討するが、文化的・精神的体系と社会構造的体系の形状は、相互に符号し合っているわけでもないし、時間・空間的に同時に変化しているわけでもない。

それらの原因はいろいろの危機を非常によく説明しているかもしれないが、これらの明白な要因だけでは、まだ説明されない不明瞭な部分かなり残されている。たとえば、ソローキンの仲間の学生たちの多くが、その背景や帰属社会がソローキンと同じであっても、彼らの心性に同じような「変異」がなかったのはなぜか。精神生活に変化を受けた仲間の中でも、大多数は革命の福音の積極的な伝導者とはならず、むしろ学校のこれまでの正規の生活を続けたのはなぜか。それに対して、ソローキン自身は、革命の遍歴伝導者という、危険で非常にづらい活動に身を投じ、自分の健康や心の平和が著しく損なわれるまで、このような活動を続けたのはなぜか。ここには経済的な誘因もなく、その他の感覺的な利益、つまり、このような専従によって得られる権力や人気、尊敬、安全、感覺的な慰安などもなかった。けれども、他の多くの革命の伝導者のように、彼はある強力な、ときどき返された。

このような「なぜか」という問いは、まだ不明瞭な暗黒部分が残されていることを示している。これは他の多くの人々の精神生活にもみられるのである。この不明瞭な暗黒部分は、人間やその精神生活が「経済的」理論や「本能的」理論、あるいは「フロイ德的」理論、その他の有名な理論の大半が示すよりも、はるかに複雑なものであることを示唆している。ソローキンの人生でも、その後何回となく繰り返された、この種の経験や行動は、彼の後年の論文で展開された人格・認識・創造に関する「統合理論」や、社会的・文化的過程に関する統合理論の一部示されている。

この統合理論は、人間とその社会文化的世界に関する「簡略化した」理論の半面性を示すとともに、「超有機的な」自然や人間の作った社会文化的世界が極端に複雑であることを示している。この統合理論によれば、人間と人間の作った社会文化的世界は、肉体の生命維持的エネルギーのみならず、より高次の合理的・意識的な思考エネルギーも含み、さらに合理的・生命維持的エネルギーとは異なる、創造的な天才のもつ最高の「超合理的な」エネルギーの働きをも含むのである。

## 七、精神的危機以後の統合

ソローキンは実際に一文無しで聖ペテルブルグに到着した。彼は自分の肉体と魂を維持するために、ただちになんらかの仕事に就かなければならなかった。アパートの守衛の手伝い、工場労働者、書記、中間層の男子の家

庭教師、地方新聞にたまに記事を書くこと、これらが聖ペテルブルグでの最初の二年間の仕事であった。この稼ぎでは彼の最低の欲求もほとんど満たせず、ただ彼を生かすだけであった。その後、彼はもつと有利な家庭教師をしたり、いろんな雑誌に寄稿したり、M・M・コワレフスキー教授のような卓越した学者兼政治家の秘書や研究助手をしたり、聖ペテルブルグ大学から奨学金をもらったり、また一九一四―一五年以後は心理神経科大学の講師や聖ペテルブルグ大学の私講師 (Privatdozent) として生計を維持した。

ソローキンは勉強を続けようと思つて、一九〇七年にロシアの首都に到着すると、ただちに優良な夜間学校の一つに入学を許され、そこで二年間学んだ。この二年間に、彼はかなり厳しい「成熟試験」、つまりロシアの高等学校ギムナジウムの全八年間に相当する検定試験の受験準備をし、一九〇九年の春、見事に合格した。この試験に合格したことによって、彼は新しく開校した心理神経科大学に一九〇九年に入学し、一九一〇年に聖ペテルブルグ大学に転校できた。大学を最優等の成績で卒業した彼は、刑法と行政法で「大学から教授職準備の要請」をうけた。その時、大学の教育課程に社会学専攻コースはなかった。一九一六年に、彼は大学から課されるあらゆる要求に見事パスし、「刑法と行政法の修士称号」を授与され、一九二〇年には、同大学から社会学博士の学位を受けた。社会学は一九一八年に、この大学の教育課程に組み込まれた。

手短に言えば、以上が一九〇七年から一九二〇年（一九一七年の革命前夜とその後）までに、ソローキンが所属した集団であり、社会階級である。

この時代の彼の精神的・文化的生活過程に関する主要な傾向は、音楽や文芸、絵画や彫刻、建造物や演劇などにおける不滅の文化的価値を大いに吸収すること、危機によって培った世界観を充実・発展・統合することにあつた。

聖ペテルブルグに到着してまもなく、彼は文芸、音楽、絵画、劇場などのロシア人の指導者と知り合いになつた。また、さまざまな文芸・芸術集団や哲学・倫理・文化の学会に出席したり参加したり、またいろんな博物館、音楽会、演劇を見ることによって、さらに個人的な研究によって、彼はこれらの分野にかなり関心を置くようになった。

彼は革命活動を継続していたので、一九一一年と一九一三年にあらたに二回投獄され、また社会革命党、社会民主党、立憲民主党、無政府党、君主党、その他の政党の指導者と知り合いになつた。彼が大学のゼミナールで後にケレンスキー内閣や共産党政府で指導者になつた社会革命党や社会民主党の学生と一緒に革命研究や科学研究で協力したことが、彼らとの間に親密な友情をもたらした。一九一八年に彼が死刑の宣告を受けた時、ボルシエヴィキの学生との友情が共産主義者の銃撃による処刑を免れる原因になつた。カラカーン、ピアタコフ、その他の者がヴェリキ・ウステイユクの共産主義者チェッカによって下された死刑文を知った時、彼らはレーニンのところに行き、この文書をただちに抹消してソローキンを刑務所から解放することを要請した。レーニンはそれを忠実にに行い、同時にソローキンについて最初のお世辞記事を『プラウダ』に書いた。その後、レーニンはソローキンについてお世辞抜きの三つの記事を書いて、彼を「一流の反動的イデオロギスト」とか、「奴隸制と農奴制の擁護者」、「われわれの執念深い敵」などと決めつけた。

このような積極的な政治研究が、彼を政治学や実践的政治学の分野にしっかりと釘づけた。最後に、夜間学校、心理神経科大学、聖ペテルブルグ大学と続く教育課程の厳しい要求に対応することによって、彼は哲学や数学、物理学や生物学、社会心理学などの具体的知識を獲得した。この知識は、これらの諸科学の基本問題や、彼がすでに師範学校当時に強い関心を抱くようになった社会学や社会哲学、歴史哲学の基本問題を一生懸命に研究

することによって、著しく増大した。

このようにして、一九〇七年から一六年の間に、ソローキンは自分の文化的・科学的教養を著しく増大させ、そして、さらに重大なことは、その部分的な教養をかなり一貫した一つの体系に統合し続けたことである。哲学的にみれば、この体系は論理的・経験科学的方法に基づいた経験的新実証主義ないしは批判的現実主義の一種であった。政治学的にみれば、それは協力、相互扶助、自由の倫理に基づく社会主義的イデオロギーの一種であった。

彼の社会学的観点は、コントール・スペンサー流の進化Ⅱ進歩の社会学をミカイロフスキー、ラヴロフ、ド・ロベルティ、ペトライツキー、コワレフスキー、ロストフチエフ、パヴロフ、トルストイ、ドストエフスキー、ヤコフなどのロシアの学者たちの諸理論や、デュルケーム、ジンメル、ウェーバー、シュタムラー、パレート、マルクス、その他の西洋の学者たちの諸理論で修正し補足した一種の合成物であった。それは二〇世紀の破局的時代に属する以前のロシアや西洋の思想家たちの「世界観」にかなり似た楽観的な世界観であった。

一九一一年から一六年にかけて出版された彼の科学論文や社会時評、ならびに『犯罪と罰則』という著作は、この世界観をさまざまな観点から述べたものである。彼はこのような出版やさまざまなゼミナール、科学・哲学・政治の会合への積極的参加、さらに心理神経科大学での社会学の講義によって、優秀な学者、著名な政治指導者、雄弁家であり作家であるという評判を得た。彼の名前は、ロシアの知識人の間や、さまざまな小作農・労働者の団体内でも、また帝政時代の官僚や警察でも、かなり知られるようになった。

簡潔に述べれば、以上がこの時代のソローキンの精神生活の主要な変化であった。

## 八、新しい危機と再統合

第一次世界大戦が、ソローキンの楽観的な世界観や歴史過程を進歩とする考え方に割れ目を作りはじめていた。一九一七年のロシア革命が、この割れ目をさらに大きくし、やがてその価値体系と「進歩的」、合理的、実証的社会学体系がもつ世界観を壊してしまった。人類は徐々に開発されて道徳的に高尚になるのではなく、このような歴史的事件は、人間の中にある「動物的魔性」を解放した。この歴史的段階では、高貴で賢明な人はしだいに少なくなり、大多数の不合理な人間動物が相互に盲目的に殺し合い、これまで大事に育ててきたあらゆる価値が無差別に破壊され、短慮で冷酷な「指導者達」に導かれて、天才のもつ創造的な業績が「覆された」のである。

二〇世紀は人類が文明化され開発される時代と思われていた。つまり、以前の観点によれば、すべてのものは調和して無知から英知と科学へと向かい、野蛮から文明へ、「神学的」段階から「実証的」段階へ、圧政から自由へ、貧困から無限の豊かさへ、醜悪なものから常に美しくなるものへ、動物性から高貴な人間性と道徳性へ向かうことになっていた。だが、この思わぬ世界的規模の無知・非人間性・殺し合いの力の暴発によって、ソローキンは人間・社会・文化・価値に関する自分の「甘くて愉快な」見方を厳しく再検討せざるを得なくなった。

このような再検討は、一九一七年から二二年にかけて彼が個人的に経験したことによっても鼓舞された。彼の著書『ロシア日記から』(Leaves from a Russian Diary)は、このような経験を詳しく取り上げている。

革命の最初から、ソローキンは革命的再建のために全身全霊を抛って、社会革命党の指導者の一人として、党の機関紙デロ・ナロゲーとヴォリア・ナロゲーの編集者として、ロシア共和国議会議員として、全ロシア小作農会議の組織者の一人として、ケレンスキー内閣の一員として、また聖ペテルブルグ大学の著名な教授として献身



した。長年、ロシアやその他の国々の基本的再建のために闘ってきた彼は、この再建が自分達の目的を実現するために善悪すべての手段を駆使する良心のない指導者に導かれた大衆の盲目的・破壊的暴力によって行われようとは、思ってもみなかった。彼には、適切な科学的知識と普遍的かつ永遠の道徳的規範の統合力による導きがありある、苦痛のない再建を実現する必要条件のように思えたのである。

このような確信が、共産党および政府の初期の冷酷・無知な非人間的政策―現在では、かなり建設的な政策に変わっている―に対して、拒絶感をひきおこし、また敵対者に対する共産主義者の残虐で破壊的な暴力に対して、共産主義革命の最初の五年間にもたらされた「荒廃のいまわしき」に対して、反抗心を起こさせた。彼の「楽しく進歩する」見方をそのままにしておくにしては、あまりにも多くの憎しみ・偽善・盲目性・加虐的破壊・大衆虐殺があったのである。

このような「実存的諸条件」や、この年代の試行的な個人的経験が、彼の世界観の再検討と彼自身の価値観の再評価をはじめさせた。彼の見方・価値観、とりわけ「自己」の再建は、彼が共産主義ロシアに住んでいた五年間にしだいに進み、その後、国外追放になって、ヨーロッパとアメリカで進歩した。

一九二〇年代の終りまで、この苦痛ではあるが、同時に幸福な再統合の過程は続き、徐々に成熟して、その本質的な特徴を備えるようになった。それはソローキンが後に哲学・社会学・心理学・倫理学・価値観の統合体系と呼んだものであった。彼が一九二五年から一九二九年までに出版した『革命の社会学』、『現代の社会学理論』、『社会移動』、『農村―都市社会学の原理』などの著作は、すでにこの再統合の特徴を示し、まだ完成していないが、十分に進歩していた。彼の著書『社会・文化動学』（一九三七―四一年）、『現代の危機』（一九四一年）、『災厄期の人間と社会』（一九四二年）、『社会・文化・人格』（一九四七年）、『人間の再建』（一九四八年）、『愛の様式と力』（一九四八年）。

（一九五四年）、『現代社会学の流行と弱点』（一九五六年）や、一九三〇年から六一年にかけての時期に出版したその他の著作は多少成熟した再統合の結実である。

これらの著作を書いたソローキンは、多くの本質的な点で、彼の再統合理論がアメリカやヨーロッパの社会学者や歴史家、心理学者のこれまでの理論から著しくかけ離れていることに気づくようになった。

このようなわけで、ソローキンは彼の「統合的」観点に対して、第二次世界大戦まで大革命や第一次世界大戦の苦しい経験をしたことのない社会心理学者たちの側で、強い反発があることを予期していた。だが、彼は自分の「型破りの」統合的立場に対して厳しい批判や不愉快な結果を招こうとも、これらの著作を出さないうで置こうなどとは一瞬たりとも思わなかった。彼のいつもの「頑固さ」と、学者の最高義務は自分の見たままの「真理を語る」ことだという深い確信が、あらゆる結果を無視して、躊躇することなく、これまでの諸理論に対する挑戦を、その後の諸論文によって行わせたのである。当然、予期した反発や不利な「実存的」結果を招来した。

しかし、このような否定的な結果とともに、多くの肯定的な反発もあった。少し驚いたのだが、彼の「統合的な」見方や理論は、世界の社会学者や心理学者、哲学者、宗教指導者、すぐれた思想家たちの側に熱狂的な反応を巻き起こした。彼の著作は人類の主要言語に翻訳されて、その「型破りの」理論は広く議論の対象となり、すでに彼の著作について多くの本が書かれたり、博士論文のテーマになったり、多数の科学論文に取り上げられたり、社会学や社会思想史の教科書で特別の章として取り扱われている。そして、時が経過するにつれて、彼の「織り糸」は世界中でむしろ注目されるようになった。個人的には、彼は自分の「精神的所産」に対する肯定・否定の両反応に満足しているようだった。

その他の「実存的」諸条件は、七三歳になった時点でも、満足はいくものであった。すなわち、彼の健康は年

令の割にはむしろ良好な方であり、まだかなり猛烈に研究や書き物や講義も続けられ、レクレーション活動も楽しんでいたからである。アメリカや諸外国の大学・研究機関から講義や相談のための招待が絶えず、いくつかの政府の招待も続いた。

人生には常に苦難がつきものだが、このような実存的な諸条件が、世界や仲間、自分自身と平和に暮らすのに役立つ。人間がいま自分自身を見いだすのに最も不都合な騒々しい状態にあるにも拘わらずである。だが、この平和は、現代の最高の課題、つまり新しい世界的な破局を防止して、新しい、より高尚な、より創造的な秩序を人間の世界に構築することに、微力をささげようとすることを妨げはしない。

## 九、結論

ソローキンの研究の主要課題や彼の「織り糸」の性格の基礎をなす実存的・精神的要因に関する、これまでの簡潔な記述は、次のように要約することができる。

(一) 小作農の中に生まれ育ち、農村の人々やその生活様式・文化・価値に深い共感をもつ実的事実が、彼に農村問題を研究させ、C・C・ジンマーマンやC・J・ギャルピンらと協同して『農村―都市社会学の原理』や『農村社会学の体系的原典集』という三巻本を出版させることになる。この分野における既存の科学的知識によって処理され、実験され、肉付けされた実存的要因が、これらの書物の中に出てくる彼の理論と結論の大半を説明している。

(二) 彼の人生は一種の連続的な「旅のようなもの」である。それぞれ異なる職業や社会、経済、文化、政治、人種の立場・集団に常にかかわってきているので、そのような垂直・水平の社会移動が、彼に個人・社会・文化現象のダイナミックな面に研究を集中させ、T・パーソンスのような静態的・構造的な側面にあまり注意を向かせなかった原因になっていよう。彼の著書『社会移動』、『社会・文化動学』、『革命の社会学』、『災厄期の人間と社会』、『アメリカの性革命』、『人類の再建』などは、この変化がどのようにして、なぜおこるか、またこれらの現象の変化の中にもみられる一貫性・法則性を取り上げたものである。その構造分析は省略されているが、動学の詳細な分析に必要な最小限のものには触れている。

(三) 彼は二つの世界大戦と二つの革命に積極的に加担したり、それを直接観察してきたので、それらが招来する大飢饉や荒廃をもたらす伝染病、その他の災厄という惨憺たる結果を見ている。そのために、これらの現象がなぜソローキンの注目を引き、次のような著作の主題になったかは、自然と理解されよう。すなわち、このようなトピックは、『革命の社会学』、『災厄期の人間と社会』、『社会・文化動学』第三巻の中、『社会・文化・人格』の教章、またこれはソヴェエト政府によって印刷中に破壊された『人間の行動や文化過程に及ぼす飢餓の影響』というような実質的書物の中で、取り扱われている。

(四) 彼は帝政時代の政府によって三回、共産党政府によって三回投獄された。刑務所の中で政治犯ばかりでなく、その他の囚人にも直接接触しているので、当然のように犯罪・犯罪者・罰則という現象に興味をもつようになった。この実存的条件が、彼の処女作『犯罪と罰則、英雄的奉仕と報酬』となったのである。同じような条件が、彼の最初の専門である犯罪学と刑罰学の専攻を説明している。ソローキンは社会学を専攻したかったであろうが、革命以前には、社会学はロシアの大学では教えられていなかったたので、専攻分野として選ぶことができなかったのである。

(五) 彼は少年時代から絶えず多くの人間問題、つまり生計手段の問題や、彼の旅生活で遭遇したような、常に

変化する人々や集団といかに「平和的に共存するか」という問題、このような移動生活で非常に多くの状況や人間・集団・価値・事件などを経験し観察することに深くかかわってきていた。そこで人間と社会的・文化的諸問題や、その発生の道理にも関心をもたざるを得なかったのである。彼の「旅」人生そのものが、このような問題に対し絶えず挑戦し、その知的な解答を求め続けていたのである。この種の連続的な「挑戦と応戦」(A・J・トインビーの用語)は、彼に社会学や心理学、人文科学に関心を抱かせ、自分の研究と主要な専門分野を社会学に決めさせたのである。

(六) 彼は二つの世界大戦と二つの革命の渦中に生き、人間の残虐さの大暴発や、道徳心を失った個人や集団の憎しみに満ちた破壊性を目撃してきた。人間の生地そのままの飾りのない形の暴発か、大架装な「愛国的」「社会主義的」「共産主義的」「保守的」「民主的」「宗教的」という美名やイデオロギーに導かれた諸力が、なにもかも根こそぎにし、独立独歩の人々を破壊してしまった。そのような破局的な影響力が、一方では利己的・個人的・集合的な「生存競争」、暴力、憎悪、残酷の役割についての体系的研究を行わせ、他方では人間行動や社会的・文化的過程における無我の愛、同情、相互扶助、英雄的犠牲という反対の力の役割について研究させたのである。これらの「憎しみに満ちた」力や、ソローキン自身が遭遇した結果とその力の性質・根源・効果を研究した結果、ソローキンは戦争や流血の革命、暴力闘争という破壊力の反対者になり、その逆の同情、相互扶助、無我の愛の力を推奨する人間になったのである。このような状況がハーバード創造的利他主義研究センターを創設する一般的な基盤となり、次のような形の出版物の研究基盤になったのである。それらの出版物は『人類の再建』、『愛の諸様式と力』、『利他的・精神的成長の方法と技法』、『利他愛』、『利他的な愛と行動の探求』である。

しかしながら、この一般的な基盤のみでは、この課題を実現するのに十分ではなかったかもしれない。この問題に関する決定的役割は、もう一つの予期しない要因、つまりこの分野の研究に財政援助をしようというエリ・リリー氏とリリー財団による約十二万ドルの真摯な寄付によって演じられたのである。この寄付はまったく彼ら自身の創意でなされたもので、ソローキンがお願いしたとか、エリ・リリー氏やリリー財団の一員とソローキンが以前会ったことがあるとか、そういうことは一切なかったのである。優秀な工業家で市民、文化的指導者、学者―考古学者であるリリー氏によって独自に発意された、このまったく思いがけない寄付金が、ハーバード・センターの創設と約十二巻にのぼる研究書の出版に対するアリステレス的な「効果」要因をなしたのである。

(七) ソローキンは小作農―労働者の最低階層の出身であり、その階層に共通した困難性や未解放性をよく知っていたので、彼はこの階級に属する者だと思っていた。そのために無能な特権集団や裕福集団、支配集団に対して無礼にふるまうことがあった。このような考え方が、彼らの傲慢な抑圧に対して、またそのような集団が犯した多くの不正に対して、抵抗心をおこさせた。この抵抗心が逆に帝政ロシア政府との度重なる衝突をひき起こし、投獄やその他の罰を加えられる結果にもなった。このような事情は、明らかに彼の「革命主義」に関係があり、また、ヘンリー・アダムズの用語によれば「保守的なキリスト教無政府主義者」という彼の政治的立場に関係があるかもしれない。

あらゆる非創造的で無責任な支配集団に対するこのような批判的態度は、このような集団に関する以後の研究でますます強くなった。それは晩年でも、あらゆる偽君主主義に対して、またあらゆる無能で不良な政府に対して、独裁制と民主制、君主制と共和制、共産制と資本制のいずれであるかに拘わらず、そのような批判的態度が残っていた。このような主題は彼の著書に多く取り上げられているが、その態度と見方を明確にしたものは、ソローキンとW・ランデンの共著『権力と道徳性』である。

以上の実存的・知的な要因は、ある程度、彼の研究と出版物の主題を明確にしている。このような要因は、それらの要因がなぜ彼の好奇心を引いたか、そしてこれらの現象の具体的な検討に向かわせたかを、かなり明確にしている。彼の理論のこのような「条件づけ」において、実存的な諸要因が、彼の好奇心を呼び覚まし、何が、どのように、なぜかという関心をひき起こす役割を演じたのである。また、そのような要因がひよっとしてこのような問いに対して、むしろ粗雑な、未検証の、実験で確認されていない答えを出す役割を演じたのかもしれない。「知的」要因は、呼び覚まされた好奇心を引き継ぐとか、実存的な要因によって発生した特定の何かが、どのようにして、なぜ起こるかという疑問を引き継ぐ役割をもつし、また彼の好奇心がおさまるまで、またこのような問いが多少満足に答えられるまで、できるだけ体系的に、これらの諸問題を検討する役割をもつ。彼の研究の主題をなす諸要因については尚更のことである。

彼の理論の性格の基礎にある諸要因―彼が自分の書物の中で示した理論をなぜ受容したり、自分で構築したりして、その理論と異なる他の多くの理論を捨てたのかということ―に関して、これらの問題に十分な答えを出すことは非常に難しい。このような受容ないしは廃棄の一般的理由や彼自身の理論構成の理由は、調査した問題を研究する土台として、構築した理論が他の競合する理論よりもはるかに十分に真実に見えたからである。彼のすべての研究において、この標準が彼の理論の受容ないし構築に対する唯一の理由であり動機であって、その他の動機や理由はこの問題に関しては何の役にも立たなかったのである。なんらの結果も期待せずに「真理を発見し語る」という定言命法に忠実にしたがったソローキンは、自分自身の理論であっても、批判によって不十分なと

ころや誤りが発見されれば、躊躇せずに廃棄した。同じような理由によって、これまで「一般に受容されてきた」理論がまやかしてあったり不十分であると思えば、それを容赦なく攻撃した。「プラトンは友なり、されど真理はそれ以上に友なり」という古い金言は、ソローキンは自分の研究で忠実にしたがった、もう一つの公式である。

この定言命法に対する彼の忠誠という実存的要因、あるいは彼の酷評家の用語を用いると、「ソローキンの性癖」とか「ソローキンの頑固さと逸脱主義」といわれる要因は、おそらく彼の人生コースに一貫する重要な事実である。十歳で、できるだけ「独立して」「自由に」生きるように強いられて以来、彼は自分の生存手段を手に入れることはもとより、旅人生の中で常に変化する人間や集団、習俗や道徳、信仰や価値に関して満足のいく共生という終わりのない課題をもち続け、常に人生の困難な現実と拘わり合わねばならなかった。そのような厳しい「人生の学校」が、生徒をくじけさせたり、あるいは自立させ独立させている。長年、この種の学校で厳しく薫陶されてきた彼は、著しく自立的で独立的になった。彼はいつでも真理の研究においては、真理が確かめられ、あらゆる関連の証拠によって検証されるまでは、どのような権威も、どのような理論も、どのような信仰も、どのような価値も受け入れない非同調の人間であった。

彼が異常に広範な人生経験を、非常に多くの異人種や集団と拘わったこと、またさまざまな文化的風土にさらされたことが、それらの間に差異だけではなく、その類似性や一貫性にも注目する原因になったことである。各現象の具体的な研究によって補強された、このような実存的条件が、彼の理論のやや広範なこと、百科全書的性格をもつことを説明し、さらに研究した現象の中に構造的・動的な一貫性を発見して、それを定式化することに集中したことを説明している。

厳しい学問を強いるこの「人生の学校」が理論的一貫性や分析的思考の科学を発達させ、それが彼の著作の多

くに示されている。また、哲学・社会学・心理学に一貫する統合的な体系の構築に努力を重ねることや、実在・認識・創造の哲学体系、またあらゆるものが同一の基本座標軸の上に築かれ、すべてが相互に関連し合っている価値の統合体系の構築に努めることに関与させた。

一九五六年の時点で、この統合的世界観はまさしく成熟したものになった。これについてはS・C・コール編『これが私の信仰だ』（ハーパー社、一九五六年）に掲載された同じ題目の論文を参照してほしい。その世界観は、ソローキンのみならず、願わくは他の人々にとっても、心の平和と自己の統合にとって、また今日人間の世に吹き荒れている「荒廃させて―再生する」という新時代の台風に対して、その導きとなるような確固としたイデオロギー、座標軸、実存的な基礎を提示しているのである。

いま、われわれの人生航路の行手には大型の乱気流の発生が予測されている。これまで長い間、わが国の基幹産業となってきた炭鉱、鉄鋼、造船などはますます斜陽化していくであろう。農業も米の自由化によって壊滅的打撃をこうむる可能性がある。それにかわる基幹産業がまだ十分発見され確立されていない現状では、前方の乱気流は相当大きなものかもしれない。それは社会構造を根底から揺さぶるものになるかもしれない。このような新時代にソローキンの精神史を学ぶことは、大きな意義をもつように思われる。われわれはシート・ベルトをしっかり締めて、新時代に立ち向かっていく必要があるであろう。